



町民文芸

只見短歌会 令和三年十月詠草

年老いし我が愚痴深くうなづきて受け止めくれる年下の友
馬場 八智

ボーナスも退職金もなき農に生き野菜作りも駄目となりたり
渡部ゆき子

冷蔵庫のドアに小さき手跡有り見つけし我の笑顔も映る
目黒 富子

只見線復旧のニュース見る度に列車と共の思い出深し
関谷登美子

週末に泊まりに来るとふ孫二人疲れの溜まり悩み断る
新国由紀子

お土産の紙風船をふくらまし幼き頃の思ひ巡らす
渡部ヨリ子

こぶし苑シヨートステイの我にまでスタッフらみな明るく優し
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 十月定例会

天高し稚児の前転崩れおり
毬栗の落ちたる音や至福時
修 一

地下足袋の小鉤も錆びて茸の夢
河鹿笛唯それだけで故郷は
幸 生

秋高し募る思いの旅心
秋時雨落人哀れ戊辰の役
信

運動会園児の笑顔手の平に
大空に背伸びびしてみるそばの花
都

指折りて再会近き秋うらら
すき間なく詰めて宅配秋野菜
弘 子

耕せば秋蝶影をおとし行く
秋の花大器に盛りて惜しみけり
一 恵

十三夜髪梳きながら空覗く
古民家に稲刈りの音響く町
真理子

里いもの朝露背中にひんやりと
亀虫が飛ぶ我が家にも冬近し
睦 子

邯鄲の庭の片隅探し出す
幼等の笹舟を追う秋日和
妙 子

萩の花庭一面を揺らしけり
愁思とも老いの一瞬あるがまま
恒 夫

秋の日の一日大事や吾が手足
いちにちの身の塵はらう秋夕焼
礼

酌みかわす晚酌三世豊の秋
兄弟の喧嘩仲裁日短か
一 穂